

厚木市郷土資料館 第9回収蔵資料展

職人の道具

～ 神奈川の職人の道具コレクションから～



厚木市教育委員会

ごあいさつ

この度厚木市郷土資料館では、第9回収蔵資料展として「職人の道具」というテーマで展示会を行うこととなりました。収蔵資料展とは、厚木市が収集してきた資料の一部を広く市民の方に観ていただくというものです。

かつて「職人」とよばれる人々は、私たちの生活にとって身近な存在でした。彼ら職人は、生活に欠かせないさまざまな道具を、親方から弟子へと引き継がれてきた技と道具で生み出してきました。しかし、近年の生活の変化により、こうした道具も活躍の場を失い、職人の技とともにその道具もみられなくなりつつあります。

本展示会では、郷土資料館が収蔵している石工、下駄、菓子などの職人が使った道具に加えて、平成11年2月に県の有形民俗文化財指定を受けた「神奈川の職人の道具コレクション」（17職種、1,982点）の一部を借用展示いたします。指定された資料には厚木市域のものも含まれており、それらを市民に公開することにより、厚木だけでなく他地域にも同じ職種の道具がある場合には、周辺地区の職人の道具との比較も可能となります。

厚木の職人の道具、県内の職人の道具、この2つをあわせて展示することによって「職人」の世界の一端をみることができます。

最後になりますが、展示会の開催にあたり、資料を寄贈していただいた市民の方々、共催の神奈川県立歴史博物館および関係者の皆様、御協力を賜りました皆様の御厚意に心からお礼申し上げます。

平成12年6月

厚木市教育委員会

教育長

長谷川 美雪



「木地師の道具」(神奈川県立歴史博物館蔵)



作業中の独楽職人・播磨啓太郎氏



「菓子職人の道具（打ち物の木型）」（厚木市郷土資料館蔵）



「揚州の大工道具」（厚木市郷土資料館蔵）

目 次

ごあいさつ

口 絵

目 次 5

凡 例 6

「職人」とは 7

職人の技術とその道具 9

1. 石工の道具

- ・七沢石と石工、「専売白」と「ホロノミ」
- ・柴幹雄氏、北原照治氏聞き書き資料 / 飯田 孝

2. 大工の道具

- ・大工の種類
- ・前場幸治氏聞き書き資料 / 飯田 孝
- ・大工の道具 - 中国揚州の道具と厚木の道具 / 前場幸治

3. 下駄職人の道具

- ・下駄の種類と呼称、下駄職人の道具と製作工程
- ・本間昭治氏聞き書き資料 / 平本元一

4. 菓子職人の道具

- ・菓子屋の製品と製作工程
- ・菓子屋の道具 / 吉田隆一

神奈川の職人の道具コレクション 40

- ・神奈川の職人の道具コレクション / 長田 平

凡 例

- ・本展は収蔵資料のうち、職人の道具に関わる民具を展示するとともに、神奈川県有形民俗文化財に指定された「神奈川の職人の道具コレクション」（神奈川県立歴史博物館蔵）から厚木市在住の職人の道具、周辺地域の職人の道具を一部借用して展示した。
- ・展示場などの関係で、図録本文、収蔵資料一覧に記載されている資料であっても展示されていない場合がある。

展 示 information

- ・会 場 厚木市郷土資料館
- ・期 間 平成12年6月1日(木)～6月30日(金) 26日、27日は休館
- ・時 間 午前9時～午後5時
- ・共 催 神奈川県立歴史博物館・厚木市教育委員会
- ・協 力 飯田 孝、長田 平、加藤芳明、前場幸治、播磨啓太郎、吉田隆一
(50音順、敬称略)

関 連 事 業

- ・くらしの文化財探索会(1) 6月3日(土) 14時00分～16時
テーマ 「菓子職人の道具について」
講 師 吉田隆一
- ・くらしの文化財探索会(2) 6月11日(日) 13時30分～16時
テーマ 「職人の道具～民具保存の意味～」
講 師 長田 平
- ・くらしの文化財探索会(3) 6月17日(土) 14時00分～16時
テーマ 「石工の道具、大工の道具」
講 師 前場幸治
- ・くらしの文化財探索会(4) 7月16日(日) 13時30分～16時
テーマ 「職人の技をみる、体験する～大山独楽 絵付け体験～」
講 師 播磨啓太郎

「職人」とは

今回の展示会「職人の道具」では、資料館が所蔵する厚木市域の職人の道具を中心に、平成11年2月に県の有形民俗文化財指定を受けた「神奈川の職人の道具コレクション」（17職種、1,982点）の中から周辺の職人の道具、同職種の職人の道具を一部借用して展示した。

*

さて、「職人」は私たちの生活にとってあまりに身近な存在であったため、あらためて考える機会も少ないと思われるが、『日本風俗史事典』（註1）によれば「腕につけた技術でものを作り出す職業の人たちをいう。もともと農業以外の仕事についている者をさしたようで、13世紀の初めに成立した『東北院職人歌合』には医師や陰陽師なども挙げられている。今日のように限定されたのは江戸時代に入ってから」とある。

また、『日本民俗学事典』（註2）では「中世以降の文献にみられ、おもに土地に依存せず特定の技術で生活していたもので、農民以外の総称」との説明がされている。さらに、「近世では職人は手工業者に限定され、明治以降は、工場労働者は職工とよばれ、職人は伝統的な手工業者をさすようになる」ともある。

「職人」の周辺

私たちの生活に欠かせないさまざまな道具を作ってきた職人だが、その技術は親方から弟子へと引き継がれてきたものであった。つまり、職人の社会には、親方と職人（平職人）・弟子という層があり、徒弟制と年季制度が行なわれていた。徒弟とは、「近世の手工業経営において、職人の親方のもとで年季を定めて特定の技術を伝習する年少の雇用者のこと。弟子ともいう。商業経営における丁稚にあたる」（註3）ものである。また、「雇用年限である年季は10年まで延期され、後は無制限となった。徒弟は、親方の家に住み込むものであったから、その家族の一員としていろいろな家事労働まで強制された。技術伝習は、親方や兄弟子の仕事を見習って覚えるものであった。年季が明けて一人前となっても、何年かの礼奉公があり、さらに渡りという他所での修行を必要とした」ともいわれている。

このように厳しい徒弟制度は「近世末期から近代になって、職人による手工業生産が劣勢となるなかで、崩れていった」という。しかし、厳密な意味での徒弟制度は崩れたにせ

よ、このようなシステムは近年まで残り、零細な工場労働者にあっては逆に、職人社会に近い制度が残されていた。例えば、戦前、戦後の鉛筆工場の従業員などは「職工」とよぶよりも「職人」と称する方がふさわしいと思われる例もある（註4）。

「職人」関連資料について

現在、当館の職人に関する民俗資料は、市域で活躍した職人の道具を中心として収集を進めているが、その基礎資料となる次のような文献資料、絵画資料等も収蔵している。以下の収蔵品リストに、資料名とその概要を記す。

資料名	時代	概要
ばんきんすぎわいぶくろ 万金産業袋	享保17年（1732）	三宅来也著。江戸期の各藩の殖産興業政策に連動し、工芸生産に関わる書。
日本山海名産図絵	寛政10年（1798）	
江戸職人歌合	文化5年（1808）	国学者石原正明著。名古屋の版元永楽屋東四郎の刊行。江戸浅草寺で50種の職人歌合の見立て。絵師は藤原春季。
職人尽花月集	江戸	
職人風俗図巻	江戸	明暦3年（1657）以降、数度にわたって刊行された「七十一番職人歌合」のうち12職種を模写した肉筆画。
日本物産志	明治5年（1872）	
いしよくじゅうのうちかしょくおきなえときのず 衣食住之内家職幼絵解之図	明治6年（1873）	歌川国輝画。文部省の教育用摺物シリーズの一つ。どのような職人によって一軒の家が建てられるのかを解説。

【 註 】

（註1）師岡佑行「職人」『日本風俗史事典』 平成6年、弘文堂

（註2）西村浩一「職人」『日本民俗事典』 昭和50年、弘文堂

（註3）遠藤元男「徒弟」『日本風俗史事典』 平成6年、弘文堂

（註4）荒川区民俗調査団編『南千住の民俗』 平成8年、荒川区

職人の技術とその道具

職人の技術とその道具

厚木市郷土資料館では、数多くの民俗資料を所蔵しているが、館蔵の「職人道具」を職種別に概要、収集状況をみてみよう。

なお、*は今回展示を行なった資料である。

石工の道具* 4件61点

厚木市七沢の石工道具である。厚木産の七沢石を主に細工する石工の道具で、中村堅造氏、荻山定夫氏、前場近氏、加藤正躬氏の寄贈による資料である。明治以前に使われていたホロノミ、ツチ、海外にまで輸出されていたという専売臼の型25点など貴重な資料が多い。

菓子職人の道具* 2件151点

厚木の菓子職人の道具である。熊坂晴雄氏と山口孝一氏から寄贈されたものである。熊坂氏は七沢で千代本を、山口氏は厚木で山口屋という菓子店をそれぞれ営んでいた。資料には、不祝儀には欠かせない「打ち物菓子」の型、金花糖の道具などさまざまな菓子作りの道具が含まれている。

下駄職人の道具* 2件109点

下駄屋をしていた岩本建造氏、下駄の歯入れ屋を営んでいた本間昭治氏から寄贈された資料である。岩本氏は原木から下駄を完成させていく職人、本間氏は磨り減った下駄の歯の部分をつけかえる職人であった。従って使っていた道具も、若干違ってくる。

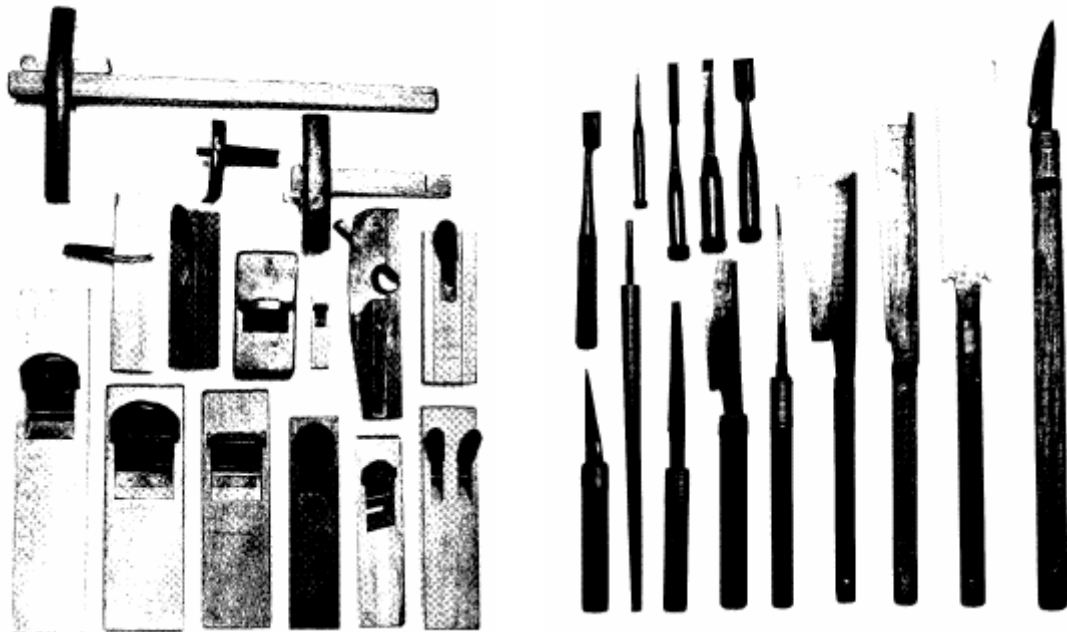
ハコヤの道具 2件51点

曾根健也氏、花上健一氏の寄贈資料である。ハコヤとは、箆笥、長持を製造する職人で、江戸時代からその存在が確認されており、荻野地区に集中してみられる。太子講という同業者の組織の名簿によると、文化5年(1808)に荻野8名、山際3名、三田で7名。約50年後の安政7年(1860)には荻野に29名の職人が記載されている。そのうちの大部分が、農業、山仕事などを主とし、ハコヤは副業であった。

帯留職人の道具

1件18点

妻田の藤井重雄氏寄贈資料であるが、使用者は加藤行雄氏であった。行雄氏は二代目で先代は旭町に住んでいた。先代は昭和天皇の御前で織ったこともあるという腕の立つ職人だったという。主な道具に、帯留作製機械、糸撚り機械、糸杵がある。



ハコヤの道具

展示物と掲載資料について

今回の展示会には、平成11年2月に県の有形民俗文化財指定を受けた「神奈川の職人の道具コレクション」の現地でのお披露目という意味もあり、なるべく市域の指定資料を多く借用し展示することに努めた。さらに、同職種の職人の道具との比較により、さらに理解を深められるものについても借用、展示することとした。

館蔵の資料については、指定資料を補完するもの、指定されたコレクションに含まれていない職種のものなどを中心に展示資料の選定を進めた。

また、図録の編集にあたっては、これまで様々な刊行物に分散して掲載されていた厚木の職人に関する情報、特に未刊行のもの、残部がなく見ることが困難なものを中心に、まとめてみられるような構成とした。

以下、石工、大工、下駄職人、菓子職人の技術、道具などについて個々にみていきたい。

1. 石工の道具

七沢石と石工

厚木市七沢の山からは、石材が産出した。この七沢から切り出される石材は緑色凝灰岩で、通称「七沢石」と呼ばれている。この七沢石の切り出しがいつごろから始められたかは明らかでないが、17世紀の後半のことと思われる。

七沢石の開発にあたったのは、信州高遠領の石工たちであった。高遠領の石工たちは、石材の産地を求めて、関東・中部地方の各地へと足を運んだ。現在知られている高遠領の石工の最も古い作例は、市内荻野にある宝永3年(1706)の題目碑である。正徳2年(1712)には石切り場に近い七沢観音寺に忠兵衛、長五郎、甚助ら8名の高遠領の石工たちによって水鉢が奉納される。18世紀初頭には、かなりの数の石工たちが七沢石の切り出しに携わっていたことを推測させる。以後、高遠領の石工の伝統は、江戸時代から明治・大正・昭和を経て、現在も七沢の地に引き継がれている。

七沢石は、鳥居、灯籠、石仏、墓石などを始め、石臼や建造物の土台に至るまで様々な用途に用いられた。販路は、厚木市内、平塚市、横浜市、川崎市、津久井郡から東京都八王子市、立川市に及んでいる。

しかし、現在は七沢石の切り出しはまったく行われていない。より良質な世界各国の石材が輸送手段の発達によって運び込まれているからである(註1)。

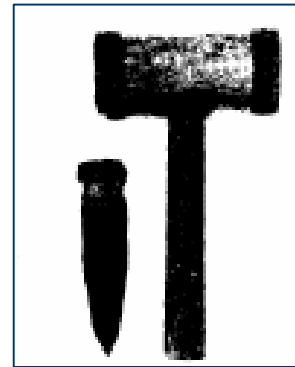
「専売臼」と「ホロノミ」

次に、資料館に収蔵されている厚木の石工道具の中から、特徴のあるものを二つとりあげてみる。

「専売臼^{せんばいす}」とは東京浅草の栗辻商会在が専売特許をとり一手販売したもので、臼の凹部分底部に特殊な金具を取り付けてあった。販路は広く、東北・北海道方面や南洋諸島、アメリカまでも及んだ。後には栗辻商会の番頭が多々商會を創業し、販売に加わったという。サイクバで加工された製品は馬方が小荷駄、馬力、牛車で平塚まで運んだ。

二つ目は「ホロノミ」である。明治期以前、石屋のノミとツチは、現在見られるような

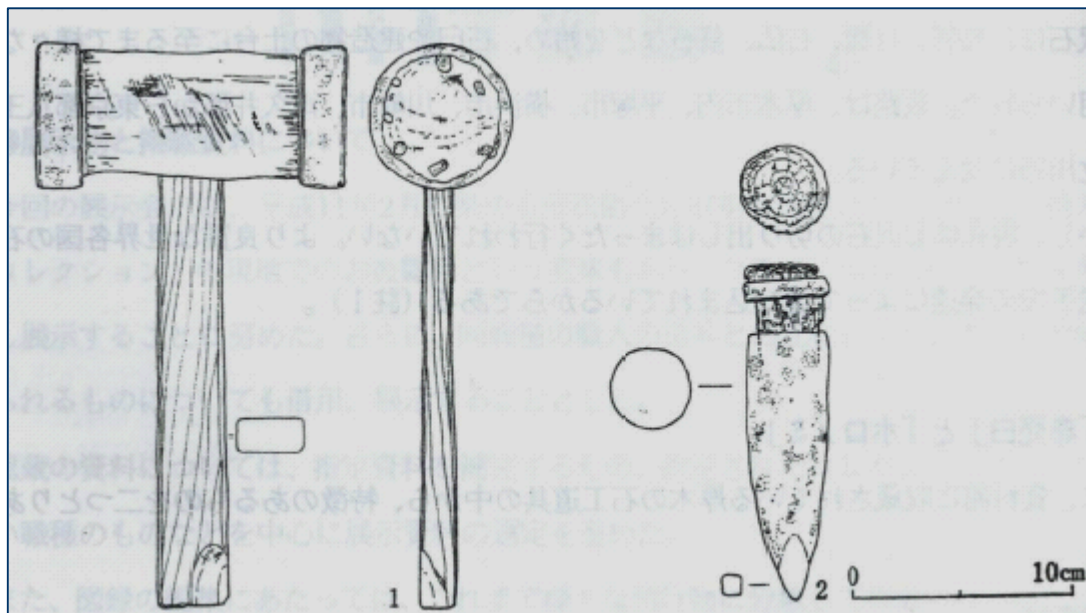
鉄製ではなかった。ノミはホロノミと呼ばれ、先端部分のみが鉄で、木を差し込んである(写真左)。打つ部分には鉄の輪をはめている。ツチは、木のツチで、打つ部分の先に鉄輪をはめている(写真右)。本資料は七沢中村堅造氏の寄贈になるものである(註2)。



【 註 】

(註1) 『 民俗資料展 あつぎの職人』平成5年、厚木市教育委員会

(註2) 厚木市文化財協会『厚木の民俗 1』昭和56年、厚木市教育委員会



ツチ(左)とホロノミ(右)

柴幹雄氏、北原照治氏聞き書き資料 / 飯田 孝

職種(技術)名 石屋

話 者 柴幹雄、北原照治

調査年月日 平成3年9月30日

1. 総観 調査地・職種・技術等

地域的特色

厚木市七沢地区は、大山山麓の地で、水田は少なく、沢沿には畑地がわずかに開けている。地区内の山からは、「七沢石(ならさわいし)」と俗称される石材が切り出されていたが、現在はこの切出しは行われなくなっている。昭和55年に実施された厚木市の諸職分布調査では、32例の石屋が採集されているが、このうち23例が七沢地区の石屋である。

技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯

七沢石の切出しと、加工の伝承は、明らかな資料によって江戸中期までさかのぼることができる。江戸時代中期、七沢には信州高遠領の出稼石屋が数多く来ていた。この信州高遠の石工たちによって七沢石の切出しが行われるようになったことは間違いない。

今回調査対象となった2名の石屋である柴・北原両氏も高遠石工の系譜である。

製作・加工の概要

石の切出しから加工、販売までを行っていたが、現在は切出しを行っていない。したがって、石材は地元以外から入手し、外国産のものも使っている。

2. 素 材

	原材料の名称	原材料の入手方法・経路など	保存状況その他
素 材	石	七沢の山から採掘した。採掘をイシホリという。採掘場所を「丁場」という。	

3. 製作・加工の工程と用具

製作・加工工程(細分の工程に留意)	具体的用具名	用具の使い方・変遷・個人的工夫等
採掘(イシホリ)	ナガノミ・火薬・セッター・ソコノミヤ・テコ・ゲンノウ	ナガノミで穴をあけ、ハツパをかける。又はノミとセッターで穴をあけ、ソコノミで仕上げでヤを打ち込む。
オオワリ	ヤ	ヤとセッターを使う。

	セッター	
コワリ	ヤ セッター	ヤとセッターを使う。
アラドリ(ノドリ)	ヨキ	ヨキで荒けずりをする。
(サイクバへ運搬)	ソリ ズリボー	ソリを使う。ズリボーはプレーキに使う。
加工(石臼の場合)	ウスッポリ・型・ヨ キ・ノミ グンデラ ブンマワシ	ヨキで周囲と凹部分を荒くほり、ノミで荒く仕上げする。ブンマワシで丸みを見て、型で寸法をみる。グンデラは荒仕上げ用具。
仕上げ(石臼の場合)	トンプ リョウハ カタハ(ヤッコ)	トンプは凹部分の仕上げに使う。リョウハ・カタハも仕上げ用具。
寸法を合せる	セイゾロイ	木型の枠(セイゾロイ)を横面にあって、下方のつぼまり具合をみて加工する。

4. 職人の職能・組織

技術習得過程	職能分担	同業者の組織
<p>柴氏の父竹三郎は、11歳の時、長野県伊那郡寺上村から当地に来て、高遠藤沢村北原出身の北原七兵衛の二男浦三郎のもとへ年季奉公に入った。</p> <p>北原氏の祖父兼太郎は、12歳の時信州高遠藤沢村北原から当地に来て、同地出身の石屋北原七兵衛に師事した。父団治も石工で、照治氏は3代目である。</p>		<p>太子講は1月22日、8月22日の年2回行った。</p> <p>会場は七沢の温泉宿で、オヒヨーゴを掛け、線香をあげて1人前の料理を供えた。</p>

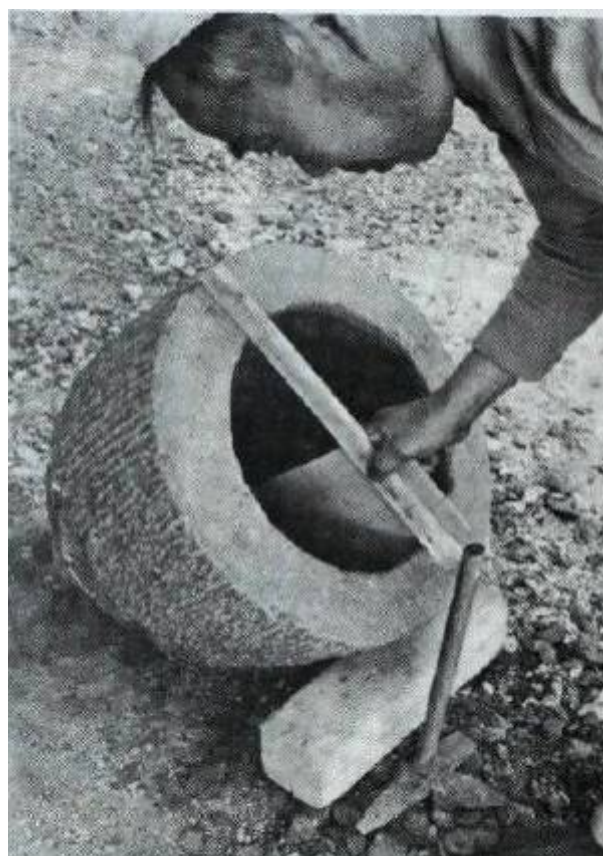
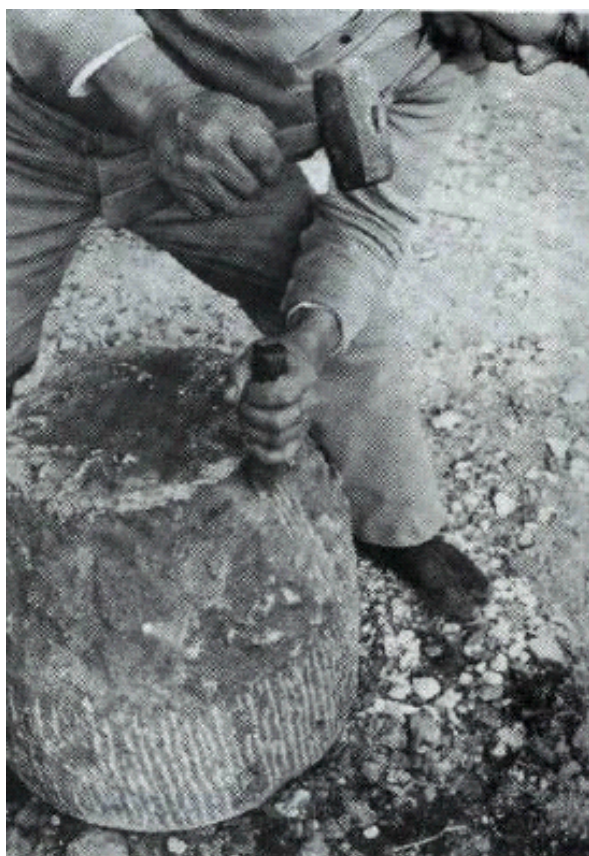
5. 職人の生活

衣食住生活	年中行事・生産暦	信仰儀礼・禁忌伝承
<p>モモシキ、トージンに印半天が作業着で、タビはメク(紺無地)を買ってつくり、サシコにはしていた。</p> <p>履物はアシナカ(普通の草履で、足裏半分のものではない)で、ワラにポロ布をまぜてつくり、はなおは山の藤をたたいて綿のようにし、これをなつて用いた。</p>	<p>採掘は春の彼岸から秋の彼岸の間に行った。冬は水分が凍るからである。</p> <p>毎月1日、15日は休日であった。</p> <p>また、盆と正月も休日で、1月26日の六夜さんのおまつり、3月18日の観音寺のおまつり、5月の節句も休んだ。</p>	<p>正月2日にキリゾメをする。</p> <p>正月8日と12月8日は厄日として山仕事を休んだが、毎月8日を休日とする人もあった。</p>

6. その他

技術伝承上の問題点	用具類等の収集・保存の実態・可能性	諸職関係資料(史料・古文書)の概要
		玉川村七沢石材運賃表(昭和13年) 石材価格取極簿(昭和14年)

(「神奈川県諸職関係民俗文化財調査票」より)



まわりのノミキリ(左)、白のカタイレ(右)

2.大工の道具

大工の種類

大工は、家屋などの建築に携わる職人。江戸時代に専門の仕事に分化し、住居を作る家大工、社寺造営に従事する宮大工、水車などを作る水車大工、荷車などを作る車大工、船を作る船大工などがあつた。ただし、宮大工の需要には限界があり、家大工との兼業者も多い。

大工は出職の代表といわれるように、各地に出向いて仕事をする出稼ぎ大工でもあつた。大工のうち棟梁とよばれる親方が、一切の工事を請け負い、家作りに関する職人を手配して完成するものである。大工の仕事には、キザミとよばれる手仕事、スミとよばれる墨掛けがある。家大工は、弟子入りすると仕事場の雑用などをしながら、鉋の磨き方、鋸の使い方などを習っていく。はじめは板削り、穴彫り、楔作りなどのあまり重要でない部分の材料を渡されるが、その後天井張り・鴨居入れ・敷居の仕上げ設計・製図の初歩などの手ほどきを受ける(註1)。

【註】

(註1) 西村浩一「大工」『日本風俗史事典』 平成6年、弘文堂

前場幸治氏聞き書き資料 / 飯田 孝

職種(技術)名 大工

話 者 前場幸治

調査年月日 平成3年9月30日

1. 総観 調査地・職種・技術等

地域的特色

厚木市七沢地区は、近世の愛甲郡七沢村で、大山東麓に位置する。七沢は水田が少なく、小台地上は畑地となっているが、地域の大部分は大山山頂につながる山林である。したがって江戸時代から石工や大工等の職人が多く、また山仕事によって人々の生活がささえら

れて来た。

技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯

話者の祖父亀吉は、半原大工の矢内氏の弟子となり、のち独立。父嘉平は祖父から技術を習得し、大工となった。

話者幸治氏は父嘉平から仕事を仕込まれたが、現在は工務店を経営している。

製作・加工の概要

祖父亀吉は宮大工としての技術を習得し、神社・寺院建築を手がけた。

父嘉平は一般建築を手がけたが神社等の仕事を受けることもあった。

幸治氏は、工務店として一般建築にあたっているが、平成2年からは長男義則氏が設計士となり非木造建築を担当している。

2. 素 材

	原材料の名称	原材料の入手方法・経路など	保存状況その他
素 材	檜(柱・差物) 杉(柱・板) 松(梁・差物) もみそ(板) さわら(板) ひば 桧(柱・板)	農家では、何年もかかって自家の山などで材料を揃えたが、現在は全て材木屋から購入する場が多い。	現在は輸入材も使われている。
素 材	屋根材(ダイタ・茅・ 麦カラ・杉皮・スレー ト・瓦・トタン) 土(壁)	茅・麦カラ等の屋根材は、農家の場合何年もかけて保存して使ったが、杉皮やダイタ等は購入する場が多い。 瓦・スレート・トタン等の屋根材は、瓦屋や金物屋から購入した。	

3. 製作・加工の工程と用具

製作・加工工程(細分の工程に留意)	具体的用具名	用具の使い方・変遷・個人的工夫等
地まつり		
水もり ちょうはり	水もり台、水もりかん杭、ヌキ、水系、オオガネ、サシガネ、カケヤ、ゲンノウ、クギ	古くは水平をみるのに水もり台を使ったが、後水もりかんになり、現在はレベル、トランシットを使うようになっている。

基礎	自然石、切石、コンクリート	基礎はトビ職と石屋の仕事である。現在はコンクリートとなっている。
スミツケ	尺ヅエ、カナバカリ スミツボ、スミサシ、 サシガネ	土台からスミツケをし、ケタ 小屋組 柱とスミツケする。
キザミ	タタキノミ、ゲンノー、 ノコギリ	
ケズリ	カンナ	良い柱は仕上げた後、ヨウジョウをする。(紙を巻き、フノリでとめる)
タテマイ	カケヤ、ゲンノー、クギ	ノチを仕上げ、ヌキ等を入れる。
コマイカキ 壁塗り	(左官屋)	
床をあげ、造作にかかる	ノコギリ、ゲンノー、 クギ	
建具・畳を入れる	(建具屋・畳屋)	

4. 製作加工の用具

図解・写真	用具の寸法にまつわる伝承・購入先・その他
現在自分の家に伝わったものの他、古い大工道具を集めて資料館(前場資料館)に展示している。	

5. 製作加工施設

図解・写真	建設後の改良、作業空間、その他
昔は常用なので、建主の家に通って仕事をしたので、決まった仕事場はなかった。	昭和40年頃から請負で建築を受けるように変化したため、作業場をつくるようになった。

6. 製品

種類	名称	用途	年間総生産量	収納保管、商圏、販売方法、決済方法など
民家	おもや			昔は常用で、1日いくらの賃金で仕事をした。
付属建物	物置 外便所 たばこの乾燥室			
木橋				

神社・寺院	本殿 拝殿 本堂 庫裡			
-------	----------------------	--	--	--

7. 職人の職能・組織

技術修得過程	職能分担	同業者の組織
話者の祖父亀吉は、半原大工、矢内氏のもとで、宮大工としての修行をつんだ。弟子を12人仕込んで一人前としたが、父嘉平は祖父のもとで、話者は父のもとで仕事をおぼえた。	昔は、穴屋、けずり屋といい、ノミで穴をほる専門の職人がおり、けずり屋といって、けずり専門の職人がいた。けずり屋は、特に上等の柱などをけずり、これを腕の見せどころとした。話者の祖父亀吉は「ツバクロ大工」と俗称されていた。これは土蔵を多く手がけたため、土蔵はつばめが土を運んで巣をつくるように、土壁で仕上げたからだという。	太子講 正月と8月22日に建具屋・左官・トビ職等の職人が集まった。ヤドは順番。第2次大戦後は七沢の温泉旅館が会場となった。太子講の時に1日の賃金と食事代を決めた。 昔は「職人はケガと弁当は自分持ち」といわれたが、農家では朝・昼・夕と三食を出すことが通例であった。これは、決められたクイブチ（食事代）も一日の賃金から差し引いて支払えばよかったからである。

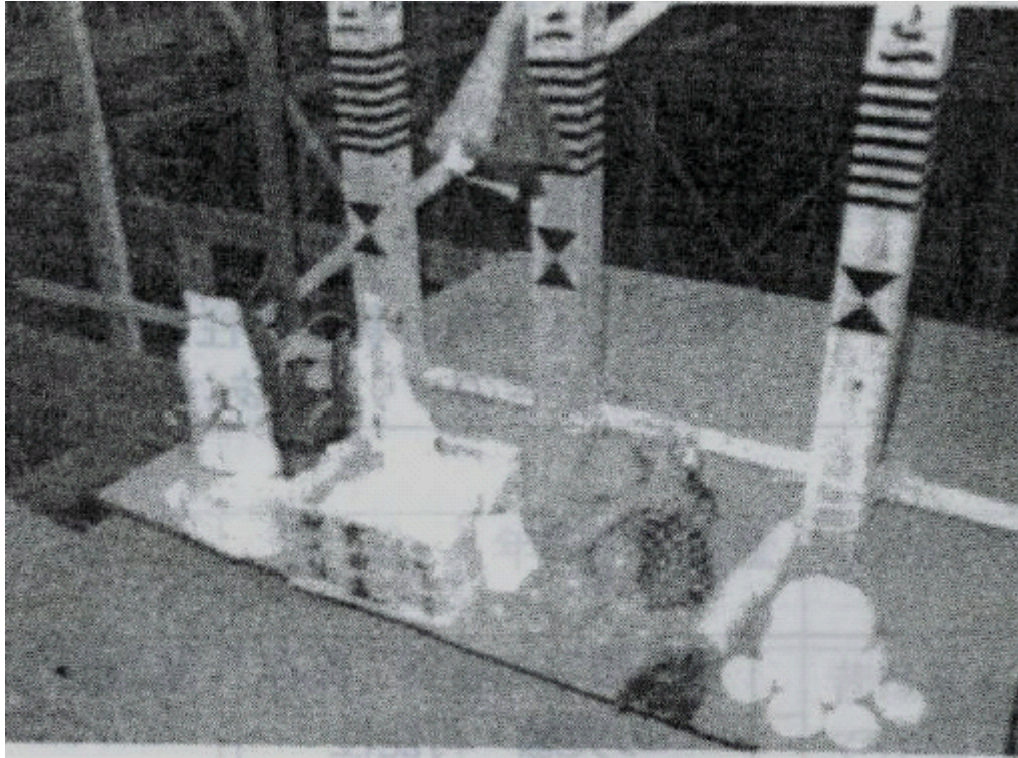
8. 職人の生活

衣食住生活	年中行事・生産暦	信仰儀礼・禁忌伝承
はんてん、もも引、はらがけ 食事は三食共仕事先の家で食べた	正月2日 材木の初荷を購入した。 正月4日 チョーナハジメをする。シャクズエ2本をつくりチョーナ2本を立ててヘーソクを切り米1升を供えて4寸角の新しい柱を置いて、みそぎのノリトをあげる。	太子講 たとえ、大安でもさんりんぼうの日にはタテマイはやらない。

9. その他

技術伝承上の問題点	用具類等の収集・保存の実態・可能性	諸職関係資料(史料・古文書)の概要
現在は設計図からコンピュータに打込み、自動で加工する。前場工務店では、プレイカット工場を他の工務店と共同で持っている。材料の多様化と仕事の細分化によって、昔のように一人が始めから終わりまで自分の手で作業する必要がなくなり、手仕事の道具も、これを使う技術も不用になってしまった。	前場資料館をつくり、ここで収集・保管をしている。	前場資料館で、大工、建築関係の古文書、絵図、和本、錦絵等収集している。

(「神奈川県諸職関係民俗文化財調査票」より)



オサンゴ

(前場幸治著『棟梁のよもやま話』冬青社、平成10年より)

大工道具

中国揚州の道具と厚木の道具

前場 幸治

はじめに

厚木市では、先に中国の揚州市から友好都市縁組を記念する中国の古典的代表的建築「あずま屋」の寄贈を受けました。「風月亭」(写真下)と名付けられたこの中国建築は森の里若宮公園の中で、相模の風情ともよく溶け合って訪れる人々に深い安らぎを与えてくれています。このとき建築のためにわざわざ来日して下さった中国の二人の大工さんはその大工道具も、記念のために厚木に残して行ってくださいました。

聞けば、この二人の大工さんは4,000人の候補者の中から選ばれたえり抜きの工人であったということです。その厚志を酌んで、今回は中国の大工道具と厚木で昔から使われてきた大工道具を見較べながら、様々な大工道具の移り変わりを歴史的に追ってみたいと思います。



建築と大工道具

私たちの国の建築といえば、まず軸組工法といわれる木造建築が代表でしょう。現存する世界最古の木造建築「法隆寺」には鋸(のこぎり)、斧(おの)、錐(きり)、鉦(ちょうな)、鑿(のみ)、槍鉋(やりがんな)の加工の痕跡が残っています。

現在の木工道具の基本となる代表的な工具が既に用いられていたのです。法隆寺建築は華々しく文化財として脚光を浴びていますが、その蔭には高度の技術を支えてきた無数の大工道具があったわけです。

道具は手技の木工用具であり、手の延長というより自分の手そのものとして、多くの道

具を駆使したとき、卓越した技術者となれたわけです。奈良の東大寺のような大きな建築でも、小さな大工道具の一つ一つによる部材の積み重ねで造りだしているのです。

建築と大工道具

大工道具は日本の道具の中でも「王者」といわれるほどに、世界的にも独特に発達してきたものですが、いつから発達したかは明らかではありません。しかし人類の祖先は、乏しい物的環境の中で、生きて行くための生活の知恵として手をもって作業を始めようとした時、身近な道具を見だし、道具を作ることによって、手道具として発達させてきました。

弥生時代、紀元前3世紀より紀元300年ごろは、木器文化が急速に発達しましたが、これは鉄製の工具が生まれたことで木材の加工技術が格段に進んだからです。

このころの低湿地の遺跡からは木製の田下駄や田舟、臼、杵などが発見されています。これら木器の加工の仕上げ段階で刀子（とうす）など鉄工具が用いられたことが分かります。

鉄器の出現

静岡県、登呂遺跡から発掘された矢板（土留の板）や建物の部材、あるいは木製品には鉋や鑿の加工の痕跡がよく残っています。

それまでの狩猟採集時代とは異なって、稲作の普及で人々は、移動することも少なく、定着して穀物貯蔵などが行えるようになると集落の優劣が発生し始め、今度は土地の拡大を求めたり、水利権を争ったりして部族抗争が繰り返されるようになってきました。

こうした抗争から鉄製の道具の発達が著しくなり、また同時に家屋建築のための、大工道具もそれに伴って格段に進み、金槌（かなづち）、鉋、槍鉋、釘、錐などが作られるようになりました。

古墳時代と呼ばれる4世紀から7世紀に全国的に造られた古墳からは、約十数例の鋸が出土していますが、形式として最も古いのは河内アリ山古墳のものといわれています。

仏殿と道具

日本の大工技術が著しく発達したのは、仏教とともに大陸からの渡来工人によって伝えられたことによります。中国で発達した建築技術が、特に南朝の梁様式の影響を受けてい

た百濟(古代朝鮮半島南部の国)から577年に造仏工、造寺工それぞれ一人ずつが渡来、続いて588年には寺工二人その他多数の工人の来日によって花開いたのです。

そして、日本で最初の瓦葺きの本格的寺院・飛鳥寺の造営が行われました。渡来した寺工たちは実際の工事に当っては、卓越した技能者であり指導者であったはずです。携帯してきた自分たちそれぞれの手慣れた大工道具を範として広めながら、我が国最大級の仏殿建築を完成させました。

その後、今から約1,200年前の天平13年(741)聖武天皇の発願によって、全国64箇所に僧寺、尼寺一对の国分寺が造営されるようになると徭役で狩り出された人々が渡来工人から様々な指導を受け、あるいは見よう見まねで軸組工法といわれる我が国独特の技術を集成するようになりました。

厚木の鉋

鉋は木材の表面や切り口を平面あるいは曲面等に削り化粧仕上げにするための道具です。15世紀なかばごろには、台鉋が使われだしたようです。それ以前は槍鉋で削りました。鉋で削った痕は、ちょうど鎌倉彫りを大きくしたように波形になります。その波形の凸面を槍鉋で削り落とすようにして表面を仕上げました。槍鉋は柄に薙刀のような刃の付いている簡単な道具ですが、非常に高度の技術を要しました。しかし、仕上げ面にはどうしても凹凸面が残ります。上等な建物の柱や床等は、更にそれを木賊や棕の葉で磨きました。

今日、使用されている台鉋は、案出されると間もなく仕事の種類によって数多くの鉋に応用されました。

日本の鉋の台は、昔から檜の良材が最も適した材料ですが檜材の少ない地方では、楓、欒、桑等の比較的材質が緻密で硬い材料を使います。台の標準寸法は、長さ約27cmで厚さは約3cmどまりです。昔の大工は自分で台を彫って、長い材木削りに一息で鉋を引っ張って、刃幅いっぱい紙より薄い削り屑が、途中で切れることがないのを誇りにしていました。

揚州の鉋

台が日本の長台鉋ほどで長さ47cm、厚さは一番厚いところで5cmもあります。台の材料は柿の木ではないかと思われれます。日本の鉋は手前に引く方式ですが、中国のものは押

して削るため、刃が仕込んである部品の全面のところに細い約2.8cmの横木が差込んであります。この横木を握り、台が浮き上がらないように、両方の人差し指を伸ばして台を押し付け、先方に勢いよく押しながら削ります。



中国大工の鉋作業

(前場幸治著『大工今昔』前場資料館、昭和61年より)

揚州の鋸

日本の普通の鋸と同じように揚州の杵鋸は、中国では日常的に使われています。日本では室町時代から製材用の縦挽用の大鋸「オガ」（鋸と反対側に綱または蔓を渡して、これをひねり、鋸身を緊張させて二人で挽く縦挽の鋸）を小さくした杵鋸は、ヨーロッパでは古代ローマのレリーフにも見えます。中国でもそれと同じ時代、あるいはもっと古い時代から使用されていたと思われます。

揚州の墨壺

金属製の小型の墨壺は糸巻きがセットされている部分が片袖に出来ています。その簡略化した珍しい片袖の表面には龍の形絵が表現されています。この墨壺と同じ形式の木製の墨壺を、私は西安で求めましたが、片袖の表面には花模様の彫刻が見事に仕上げられています。

鑿

ノミは、木工具の中でも、最も種類が多い道具です。建物を建てる前に大玄翁（げんの

う)で使用する叩きノミと、造作用の精巧な仕上げ仕事をする小玄翁で使う追入れノミと大きく分けると2種類あります。

日本のノミの柄は檜の良材を使っています。刃の本体は柄の中に入り込む「コミ」があり、その外周を口金を入れて玄翁で叩いても、柄が撥ねないように作ります。

揚州のノミは「コミ」も無く、必然的に口金もありません。ノミ本体に柿の木の柄が差込んであって簡略化されています。

鉦

昔は、日本でも中国でも斧や楔(くさび)で木を裂き割って柱や板を作り出していました。当然表面には粗い凹凸があります。それを鉦ではつりを入れて平らにします。日本の鉦は両手に槐(えんじゅ)の柄を握って、手首を上下に動かして削ります。揚州の鉦は、両手で持って振り回すようなフォームで木材を削ります。刃が片刃で本体が反り返って平面が削りやすいように出来ています。

おわりに

あずま屋を造りに来日された揚州の大工さんも、日本の職人と同じように、手慣れた自分の道具を使用しないと、思うように自分の技術は発揮できなかったでしょう。中国では数千年以前から同じ形式で変化していません。道具が十分にその機能を果たせば、その形式のまま、連綿と引き継いできたものなのでしょう。

日本では今日大工道具が急速に姿を消し、電動工具が著しく進歩しています。そのため、道具は急速に滅びつつあります。美しい日本建築を支えてきた、道具の王者、大工道具は職人の語り部として大切に守られてほしいと願っています。

(『郷土資料展示室だより13』昭和63年12月刊より転載)

3. 下駄職人の道具

下駄の種類と呼称

「下駄」とは、いうまでもなく鼻緒履物類の一種で木製の台部に鼻緒をすげたもの。下駄の台部（甲）はだいたい長方形・楕円形で、上側を平らに、地に当たる面に歯（はま）をくりぬき、その先端の中央と左右の脇に、眼（壺）とよばれる穴をあけ、足をささえる鼻緒（緒）をすげる。歯には、台部と歯を一木で作る連歯（れんし）と、台部に別材を差し込む差歯（さしば）とがあり、差歯のほぞが台部の表面に現れているものを露卯（ろぼう）、隠れているものを陰卯（いんぼう）といい、明治以前は露卯が多かった。

呼称としては、平安時代には「足駄」、室町時代には「ぼくり」、江戸時代には「下駄」が用いられた。京阪地方では歯の高低にかかわらず下駄といったが、江戸では差歯の丈の高いものを足駄とよんで下駄と区別した（註1）。

下駄職人の道具と製作工程

下駄職人には、ひとつの木片から一足分を切り出す独特の鋸(カドヒキ・イトビキ)をはじめ、歯と歯の間を削るジュウノウノミなど、特殊な道具が多い。『厚木の民俗 7』から、道具と製作工程（註2）をみってみる。

1 **キドリ、コウラ** 駒下駄の材料となるのは、「キドリ」といって桐の原木の中央部分である。また原木の周辺部分は「コウラ」といい、足駄等に使われる。また、左右一対を取り出す「組取」と、個別に作り出す「片方取」とに分けられるが、左右の木の目が合致するのが「アイメ」といって上等品である。

2 **タマギリ** 立木の原木を切り倒し、下駄の寸法に合わせてタマに切る。男性用の駒下駄の場合8寸で、幹の太い所を用い、女性用の場合7寸5分で、幹の細いところを使用する。

3 **タテビキ** タマにした木を寸法に合わせ、縦に切るノコギリである。

4 **歯形、物差し** 歯形をあて、物差しでスミを引く。歯形は自家製で、寸法に合わせてさまざまな種類がある。前後端部より歯までの寸法の比率は、後ろ側3分に対して、前側

7分である。物差しは目盛付きであるが、先端の溝には先端を叩いて筆状にした竹片を差し込み、これを墨壺につけスミを引く。

5 **タテビキ** 個々の下駄を切り離すために、前後の歯まで縦にひくノコギリである。

6 **クリノコギリ** タテビキした切れ目に差し込み、これと直角方向に切れ目を入れる。特異な形をした非常に細身のノコギリで中央に胴と直角方向に刃がついている。

7 **タテビキ** クリノコギリで入れた切れ目に差し込み切る。前作業との繰り返しで、一対の下駄を切り離す。先端の巾の非常に狭いノコギリである。

8 **アイダヒキ(片方取り)** 歯の下端部より胴に向かって切るノコギリ。

9 **マルスキ** 歯の付け根の部分を丸く削る。刃巾は下駄の寸法により異なり、8寸のもので3分くらいを用いる。

10 **オガミスキ** 歯の前後を削る。台に対して刃が斜めについている鉋。ヒラガンナよりきれいに削れる。

11 **ジューノー** 胴下面を削る。刃の両側に突起のついたノミ状工具。端部より歯までの平面については巾広のものを用い、歯と歯の間は巾の狭いものを用いる。

12 **ヒラガンナ** 歯の下端面を削る。刃巾は下駄の寸法により異なるが、およそ2寸、1寸8分、1寸6分のものを用いる。刃の角度もいろいろとあり、上等品には勾配のゆるやかなものを用いる。全体の側面はオガミスキで削る。

13 **カタイタ** テンバにカタイタを合わせ、鉛筆で輪郭、マエツボ(前の穴)、アトツボ(後の穴)を書く。下駄の種類に合わせて数多くある。アトツボはマエツボよりも径が大きい。アトツボが歯より後ろにあるものは、関西風である。

14 **カタミミジューノー(ハナマワシ)** 胴の角を丸く削る。ジューノーの代用としても用いる。ハナマワシという包丁のようなものを用いる職人もいる。

15 **ツボギリ** テンバより裏に向かって斜めに穴をあける。アゴアテを下にあて、回す。斜めにあけるのは履きやすくするためである。

16 **キクウチ** マエツボの胴下面に半円形に穴をほる。

17 **ヒラノミ** キクウチであけた半円の反対側を平らに削る。

18 **仕上げ** ヒラガンナ、メントリガンナを用い、きれいに仕上げる。刃の角度はゆるい斜めのものを用いる。

作業台・ドウグカケ 作業は土間に板をひき、作業台にすわり、背後にはドウグカケを掛け、いろいろな道具がすぐに取りれるよう工夫されていた。

作業台は歯入れ屋のものと同様にすわると前かがみになり、力が入りやすいようになっている。製品は座敷に並べ、そこで作業も行なった。

【 註 】

(註1) 宮本瑞夫「下駄」『日本風俗史事典』 平成6年、弘文堂

(註2) 厚木市文化財協会『厚木の民俗 7』平成3年、厚木市教育委員会

本間昭治氏聞き書き資料 / 平本元一

職種(技術)名 下駄歯入れ屋

話 者 本間昭治

調査年月日 平成3年8月10日～15日

1. 総観 調査地・職種・技術等

地域的特色

神奈川県を中央を北から南に流れる相模川は、古来その流量の多さをもって船運及び漁業などで多くの利便を与えてきた。特に近世においては、船運の利用度は高く、特に厚木はその物資集散地としての賑わいを有してきた。そして人々の往来も多く、多くの店が軒を連ねていた。

現在では船運利用の便は全くないが、県央地域での鉄道、道路網の発展により中核的役割を担っている。

技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯

下駄歯入れ業は、昭治氏の父定之助(昭和49年没、78歳)が、14歳の時近くの内田下駄屋に奉公に入り、その後歯入れ屋として独立した。内田下駄屋は旧上町(現東町)にあり、明治37～38年の開業である。昭治氏も戦後しばらく手伝いをしていたが、その後は廃業している。

製作・加工の概要

下駄の歯入れは、足駄などの差歯(サシバ)を入れ替える「ハイレ」と駒下駄の歯を継

げ替える「ハツギ」とにわけられる。

「ハイレ」は、下駄の歯の部分がすり減ってくるのでそれを新しく入れ入れ替えるもので、「ハツギ」はすり減った歯にコマを糊づけするものである。

2. 素 材

	原材料の名称	原材料の入手方法・経路など	保存状況その他
素 材	ハイレは歯を新しく入れ替えるものであるが、特に材料の呼称はない。材質はカシ(欒)、ブナ、ホオ(朴)等があり、厚い歯にはホオ、イチヨウ等が、薄い歯にはカシを用いる。ブナはカシの代用である。材料はカシが最上品である。 ハツギはコマを糊づけする。材質はハイレとほぼ同様である。		

3. 製作・加工の工程と用具

製作・加工工程(細分の工程に留意)	具体的用具名	用具の使い方・変遷・個人的工等
原材料を歯付法に合わせて切る(ハイレ) 原材より継ぐ歯(コマ)を切る(ハツギ)	ノコギリ	縦・横両刀のノコギリで粗い仕事に用いるものと、薄く切るなどの細かい仕事に用いるものの2種類ある。
すり減った歯を抜き取る(ハイレ) 古い歯の泥のついた部分をかき落とす(ハツギ)	クギヌキ(ハイレ) エグリ棒(ハツギ)	
歯を抜き取った後、歯の溝に残った細かい破片を取る。接着剤を塗る(ハツギ)	ヤットコ(ハイレ) セルタス(ハツギ)	接着剤である
サシバの溝をヒク コマを継いだ下駄をセットする	アリヒキ(ハイレ) ハツギシメイタ(ハツギ)	ミゾヒキとも呼び片刃の非常に目の細かいノコギリである。 ハツギシメイタは下駄の鼻緒を逃げるため、溝が切っている。
歯をコロス。 セットされたハツギシメイタを締めつけた後、一日位おく。	コロシ台、作業台、 ゲンノウ(ハイレ) マンリキ(ハツギ)	サシバを入れる時、溝に入り易いように片方をゲンノウでたたく(コロスという)。作業時、すべり落ちないように止め(木片の埋め込み)が付いている。自家製で材料はカシ(欒)である。作業台にはめ込む。

歯を差し込む。	ゲンノウ（ハイレ）	四百刃のゲンノウといい重い鉄鎚である。
歯を差し込んだ後、横にはみ出した部分を削る。	ツキノミ（ハイレ）	
差し込んだ歯を削る。	カンナ（ハイレ）	1枚歯で荒削り用と中削り用とがある。
下駄のツボ（鼻緒の穴）を大きくする。	エグリ棒（ハイレ）	穴に差し込む部分に外目がある。

4. 製品

種類	名称	用途
駒下駄	表付き	婚礼の仲人用
駒下駄	蒔絵付	花嫁などの祝儀用
駒下駄	サツマゲタ	歯が高く大人から子供まで年齢に関係なし
駒下駄	ヨシチョウ	歯先がまがっている
駒下駄	ゲホウ	舌の形状が爪先の方が広く、踵の方が少し狭い。イナセな人が履く。
足 駄	ヒヨリゲタ サカ	晴雨兼用で爪掛け（爪革）をかけて使用する。歯は低く女物である。 中高のアシダ。男女共大人から子供まで使用。 正月用
足 駄	アズマゲタ	表付き、塗りで鼻緒も金襴をつけて花嫁が履く。
足 駄	タカバ	雨天用。男物の朴歯の高下駄は歯が厚い。女物の高歯は銀杏歯という。

5. 職人の技能・組織

技術習得過程	職能分担	同業者の組織
昭治氏の父定之助（昭和49年没、78歳）が14歳の時、近くの内田下駄屋に奉公に入りそこで修得した。 昭治氏も父の手伝いをしながら学んだ。		特になし

（「神奈川県諸職関係民俗文化財調査票」より）

4.菓子職人の道具

菓子屋の製品と製作工程

菓子の歴史、道具、厚木における菓子屋の状況については、次ページからの吉田隆一氏「菓子屋の道具」に詳しい。ここでは『厚木の民俗 1』から、今日ではあまり作られなくなった打ち物と黒玉の製法をみてみよう。

黒玉は、養蚕の時に農家のお茶請けとしてよく作られた。また、打ち物は主として不祝儀の際に引出物として使われてきた。葬式のお返しとして作られていたのがお平という打ち菓子の型がある。型は長芋、クワイ、しいたけ、まつたけ、たけのこ、こんぶ、みつば、はす、干瓢等である。これも、昭和30年代半ばから次第に需要がなくなっていった。

黒玉 材料 黒砂糖、黄双目糖

通常は三人で作る。切り手、丸め手、冷まし手の三人である。

銅鍋に砂糖を入れ、少量の水を加え、強火にかけ、煮て溶かす。

口中で噛んでみてカリッとするくらいに煮詰める。

食用油をひいた冷ましドラに移し、これを冷水に浮かして回しながら、中の飴を何回か裏返して均一に冷めるようにする。

切り手は固まってしまうないように向こう火（保温装置）で暖めながら、油布巾でよくふいた麻糸を首に掛け、飴を少しずつとり細かく揉んで、左手に持ち、右手の先に糸を巻き、上向きより手前に手早く回して切る。

よく油びきした布の上で、丸め手が切った飴をころがしながら丸める。

枠の中に入れ、冷まし手が飴が丸くなるようにころがしながら丸める。

打ち物 材料 上白糖、焼味甚粉、水

ボールの中に砂糖を入れ、手のひらでよく揉み、水を少々加えてしめらせる。

湿り加減を見ながら手でまんべんなく混ぜ合わせ、心持ちしっとりするようにする。よく揉み込むことが大切。

焼きみじん粉を入れ混ぜ合わせる。

種ができれば、ただちに木型に詰めて成形する。型いっぱい種をつめ、軽く押してから余分の種を竹ベラで平らに払い落とす。

ギンベラで底を2、3回こすり、底をなめらかにしてから、ゲソをとりはずし、型の隅をギンベラで軽くたたき、型からだして木枠の中に間隔をおいて並べる。

吹き竹を使い鯛の赤い色を吹きつける。

全量を打ちおえたら、型くずれしないように軽く蒸気をかけて、しばらく風にあてておいて仕上げる。



型つめ（左）、吹き竹を使い着色（右）

菓子屋の道具

吉田 隆一

はじめに

厚木市郷土資料館には、山口孝一氏、熊坂晴雄氏の御厚意により寄贈された、たくさんのお菓子の道具が収蔵されています。これらのいくつかを紹介しながら菓子屋の生い立ち、舞台裏の一端を紹介してみたいと思います。

お菓子の歴史

稲作以前は今でいうお菓子の概念に当たるものは、果物、木の実及びその加工品でした。その時代が長い間続きました。和菓子の本格的な歩みが始まるのは、次の時代「農耕生活」が始まってからです。稲作が普及して穀物の生産量が増えてくると、調理・保存・救荒のためにと穀物の加工が様々に行われるようになりました。米を炊いて干した「乾飯(ほしいい)」、火で焼いただけの「焼き米」のように簡単な処理の仕方から、後に「もち」「だんご」そして「ちまき」のようなものに進んでゆきました。いわば穀物の加工をするということが、和菓子の源、出発点だと考えていいでしょう。現在の和菓子の材料をみても穀物の加工品が占める割合は多く、このことから穀物の加工品が和菓子の骨組みをなしているといえるでしょう。穀物の加工品こそ和菓子の本流なのです。

奈良時代、唐菓子の製法が伝えられ、それまで単純素朴だったわが国の穀物加工に、その製法や形のうえで、大きな影響を及ぼしました。また、この時代に、唐僧鑑真により初めて砂糖が伝えられましたが、その量はごくわずかで上層階級の薬用として使用されたのにすぎませんでした。室町時代になってようやく菓子にも一部砂糖が使われるようになりました。安土桃山時代には、ポルトガル、スペイン人などからも砂糖が輸入され上層階級のみでなく、一部富裕商人まで砂糖が広まりました。また、彼らは、ビスケット、パン、カステラ、金平糖、カルメラ等の南蛮菓子を伝え、後の和菓子の材料、製法に少なからぬ

影響を与えました。

江戸時代中ごろになると、ようやく国内でも本格的な砂糖の生産が行なわれるようになりました。まず、徳川吉宗が享保の頃(1716~1735)、砂糖きびの栽培を奨励しましたが、この時はあまり普及しませんでした。しかし、その後も砂糖きび栽培の努力は続けられ、徐々に定着してゆきました。その時に、大きな功績を残した一人に池上行豊がいます。彼は大師河原村(川崎市)の人で、自分が開発した新田で、宝暦年間に砂糖きびの栽培に成功し、それからいろいろ苦労した後に砂糖を精製することに成功しました。彼は、寛政8年(1796)に、日本で初めて氷砂糖の精造にも成功しています。このように江戸時代中ごろには厚木の周辺にも砂糖の生産地があったことがわかります。寛政の頃にはようやく砂糖の生産が軌道にのり、やがて全国の暖地に広がってゆきました。そして、江戸末期には讃岐、阿波、和泉、土佐、駿河、遠江などに大きな産地ができました。

このような砂糖生産の普及を背景に、町人社会の台頭、京都の菓子屋の江戸進出による菓子技術の普及化という要素が相俟って元禄時代以降、製菓技術に大きな進展が見られ、江戸時代後半には現在の和菓子の一応の原形が整いました。桜もち、金つば、大福餅、蒸羊羹、おこし、塩せんべい、今川焼き、最中等現在の我々にも馴染みの深い菓子があらわれています。しかし、それらのお菓子は、一般の庶民にとってはまだまだ高価なもので、たやすく口にすることのできる物ではありませんでした。では、現在のように一般の人々が砂糖を使用した甘いお菓子を口にすることができるようになったのはいつごろのことでしょうか。それは日清戦争後の台湾占領の後、台湾にて砂糖産業の大規模な開発が進められ、安価な砂糖が台湾から大量に入ってくる明治後半から大正ごろのことです。大正時代の記録に「明治の頃は地主の家の茶請けでしかなめることのできなかつた白砂糖が農家のどこにでもあった」と記録されていることからこの事が伺われます。言いかえると、私たちの暮らし、私たちの口に砂糖が入り込んできたのは、わずか100年くらい前のことにすぎないのです。しかし、そのわずか100年の間にも一時期空白の時期がありました。それは第二次世界大戦の時です。すでにお菓子は日常的な食べ物となっていましたから、ふだんの暮らしからそれがなくなってしまうと、どんなに寂しく味気のないものであるのかを感じずにはいられませんでした。逆にいえば、お菓子が我々の生活にいかに深く根ざしていたかを再認識させられた時期でもあったのです。

終戦後、その反動で甘いお菓子に人々は群がりました。とにかく甘いものであれば何でも良かった時代でした。しかし、だんだんと期間が経って、人々の暮らしも落ち着いてきて、生活も良くなると、逆に甘さをおさえた菓子の方が好まれるようになっていきます。しかし、なんととっても驚かされるのは、現在のお菓子の多さとその量です。百花繚乱の言葉を菓子にあてはめれば、まさに百菓繚乱の時代です。様々な菓子がはなやかな色で我々の暮らしを彩っています。それは平和で豊かな時代に私たちが生きている証でもありましょう。

菓子屋のおいたち

菓子は、長い間料理の中の一つとして位置付けられていました。ですから初期の料理屋は、うどん、菓子なども作っていました。したがって麺類も菓子の親戚にあたります。現在、料理の器に菓子椀というものが残っていることからこのことが伺われます。その料理屋の一部であったものから菓子屋へと分離独立させたのは、茶道の影響が大きかったのです。初期の茶道は、上層階級でもっぱら流行していたので、茶に添えられる菓子には巧緻なものが求められ、茶の菓子「点心」に趣向がこらされるようになりました。それにつれて菓子の技術が高まり、いままで料理人が兼ねていたものから菓子の職人が分化し、専門化して独立しました。しかし、それは一部の特権階級の人たちのためのものであり、社会的な意味での菓子屋らしい菓子屋ができたのは、砂糖が使えるようになった江戸時代中期以降のことでした。

厚木では、江戸時代までさかのぼる菓子屋で代表的な店は菊屋政房で寛政11年(1799)から現在まで引き続き営業しています。菊屋の創業は菊屋弥七により、三代目菊谷彦兵衛政房の時、菓子司として菊屋長門椽を称し、明治に入って彦兵衛政房の名をとって屋号を「菊屋政房」としました。菊屋に奉公し、修行した後、独立した店は菊香堂他何軒があります。

また、もう一軒、天保頃に三代前の押田亀蔵氏が行商より身を起こして開業した萬屋があげられます。萬屋は大正時代に店を閉じてしまいましたが、ここからは萬盛堂、岡田の万寿軒他何軒かの菓子屋が巣立っていき、厚木の菓子屋の形成に大きな足跡を残しました。他に及川、下川入、下依知にも店がありました。上依知、酒井にあった店も江戸時代までさかのぼりそうです。しかし、厚木において、菓子屋が開業した時期を調べますと、やは

り明治後半から大正にかけての時期が一番多く、この頃市内各地で新しい菓子屋が生まれています。この時期に開業し現在も引き続いて営業している店は、万寿軒、岡田の山口屋、新光堂、倉田屋、高砂屋などです。

菓子屋の道具

菓子屋は技術さえあれば比較的小資本でも開業できます。普通の規模の菓子屋道具にはそれ程大がかりなものはありません。しかし細かいものまで含めると比較的多いので、全部を紹介するのは紙面の制約上できません。ここでは一般の人にも理解しやすい道具を選んで紹介します。

1 **金花糖の型(図1)** 砂糖を煮つめ、すって白濁させたものを、食用油を塗り込んだこの型に流して冷まして固めます。固まったら型から取り出して、筋がついている所を折ると、三角の形の金花糖ができあがります。

2 **カステラを焼く型(図2)** 材質は銅、型の中に和紙を敷き込み、カステラの種を流してフタをして焼く。まず、型を炭火の中に置き、フタをした上にも炭火をのせて蒸し焼きのようにして焼く。オープンのなかった頃の型でかなり古いものです。

3 **だんご作りの木型(図3)** だんごを作るときに使う。上新粉(うるち米の粉)をお湯でこね、蒸してついたものを棒状にのし、この型に入れ、取っ手のついているフタをかぶせ、前後に動かすと丸いだんごが一度にできます。だんご作りには、この他にも様々な作り方があります。

4 **焼き判(図4)** 焼きまんじゅうに模様をつけるものです。まんじゅうを蒸して、荒熱がとれたら、油をひき込んだ金型をのせて、それを裏返して焼く。焼きまんじゅうは、葬儀のときの参列者への配り物、香典返し、お盆の時の供え物等法要の引き出物用として用いられます。

5 **竹べら(図5)** 主に上生菓子(練りきり、求肥等)の飾りに使用します。一本の竹べらに様々な模様がつけてあり、それをいろいろに使いお菓자에模様をつけて仕上げていきます。菓子職人の腕の見せ所です。

6 **焼き印(図6)** 焼き印にもいろいろありますが、写真のものは葬儀の際、参列者への配り物、香典返しに使われた俗にいわれる葬式まんじゅうの上に、火床で熱したこの

焼き印を押しあてて模様をつけたものです。

7 せんべいの反り型(図7) 粉せんべいに反りをもたせるために用いられたものです。一見すると何の変哲もない板のようですが、中央に溝ができており、この上に焼き上げたばかりのせんべいをのせるとまだせんべいはやわらかいので型通りの反りがつきます。1分ほどすると堅くなってできあがります。代表的なものは瓦せんべい。菓子屋さんでは通常ドブ板といっていました。

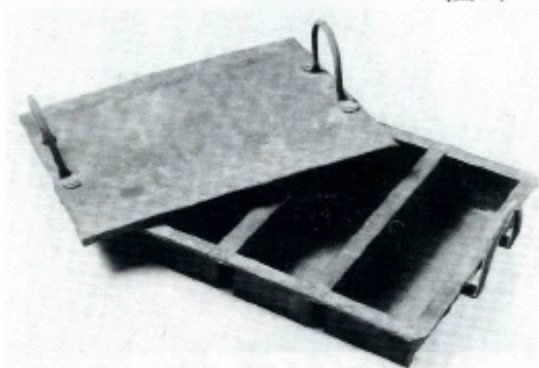
8 菓子箱(図8) 漆塗りの箱で、この中に作った菓子を入れて売りました。この絵をみていると一昔前の菓子屋の店先が思い出されます。



(図1)



(図3)



(図2)



(図4)

菓子屋の道具 寄贈者について

1 山口屋(岡田) 山口孝一氏資料

山口菓子店は先代・林蔵氏が大正10年から昭和45年頃まで営んでいたもので、本資料はその間の和菓子製造に使用されたものです。林蔵氏は市内岡田の山口屋の弟でした。その当時使用していた道具をほぼ一括して寄贈していただいたのでその資料的価値は高いものです。打菓子の木型多数、焼き判、天板、竹べら、杓子、ソリ型、めん棒、あんねり、あ

んとり、かぶと鉢、へら、抜き型、押し型、げんべら等128点が寄贈されています。

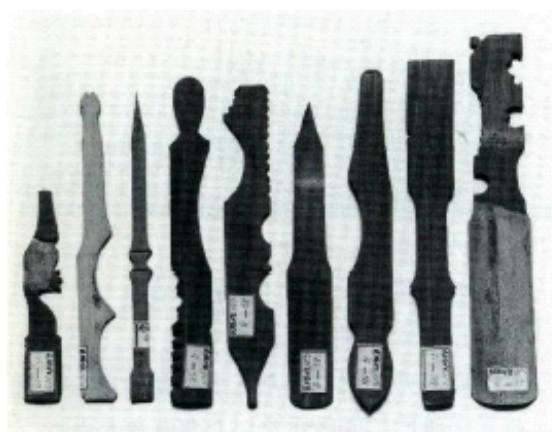
2 千代本(七沢) 熊坂晴雄氏資料

本資料は、熊坂晴雄氏が七沢から関口に引越される際に寄贈されたものです。これらの道具は先代・弥市氏が使用していたもので、弥市氏は明治25年から昭和10年頃まで七沢で菓子屋を営んでいました。屋号は千代本です。せんべいや干菓子を乾燥させる為の道具、金花糖の型をはずすために水を入れるブリキ敷きの箱、羊羹流し、菓子箱、菓子を作る道具を収納しておく箆笥等23点が寄贈されています。

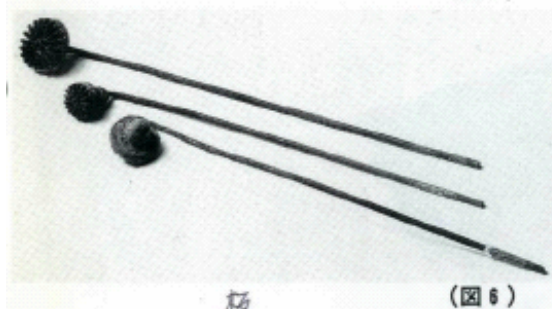
おわりに

お菓子は長い歴史のうえでは、その消長を通じて、ときに特権階級の占有物に近いときがなかったわけでもありませんが、次第に我々の生活の中に深く根をおろしてきました。現在ではお菓子のない生活など考えられません。四季を彩り、行事や習慣とも結びついたお菓子は、これからも栄養の糧、心の糧として私たちの生活に明るい花を添えていってくれることでしょう。

(『郷土資料展示室だより10』昭和62年3月刊より転載)

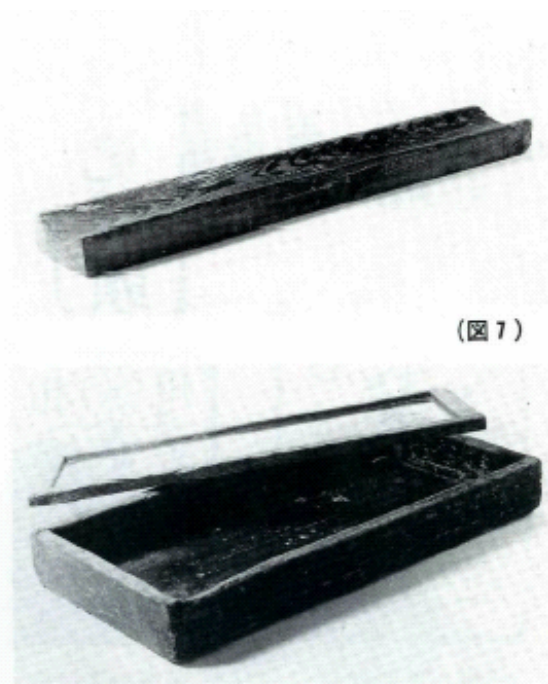


(図5)



杖

(図6)



(図7)

(図8)



神奈川の職人の道具コレクション

長田 平

(神奈川県立歴史博物館 専門学芸員)

「神奈川の職人の道具コレクション」について

当館所蔵の「神奈川の職人の道具」コレクションが、平成11年2月に県指定有形民俗文化財の指定を受けた。内訳は、17職種1,982点である。はじめに、本コレクションの指定理由の内容を記しておく。

「このコレクションは、神奈川県立歴史博物館が長年収集してきた有形民俗資料のうち、工芸関係の職種を除く県内の職人の道具を多職種にわたり収集・整理したものである。内容は、鍛冶屋、桶屋、大工などの全国的にほぼ共通して存在する職人の道具から、木地師、物差職人などの県内でも限られた地域で活躍した職種の全国的にも貴重と考えられる職人の道具までが含まれている。

職人の道具は、ひとりの職人がどれくらいの道具を駆使してその仕事に従事していたかを把握できることが資料として重要である。その点このコレクションは、多職種にわたる職人の道具がそれぞれ一式揃えられ、製作過程のそれぞれの道具や技術を知ることができる資料であり、有形民俗文化財として学術的価値があると考えられる。

この「職人の道具」コレクションは、県内の広範な地域から収集してきたものであり、県内の職人の様相をうかがい知ることができる。早くから都市化が進行し、有形民俗文化財が消滅しつつある地域とされる神奈川県における職人の様相を後世に伝えるうえで、道具だけでなく、製作の工程や、職人の信仰習俗などを知ることのできる資料も含まれており、貴重な有形民俗文化財コレクションといえる」。以上が指定を受けた理由である。

さて、われわれの日常生活は、職人と呼ばれる人たちのワザ(技術)によって支えられてきた。そして、かつてはこうした職人と呼ばれる人々がわれわれの生活の中で身近な存在であった。職人たちは親方から受け継いだ技術をさまざまな道具を用いて、われわれの生活に必要な品々を作り出してきた。しかし、近年の技術革命によって、さまざまなモノが大量生産され、職人たちの

活躍の場がなくなり、長年受け継がれてきた伝統的な手仕事のワザの多くが消えた。同時に職人の手足として使われてきた道具たちも活躍の場を失いつつある状況下において、博物館では開館以来、機会あるごとに資料の収集に努めてきた。その結果としてこのような貴重なコレクションを収蔵することができた。

指定理由にもあるように、鍛冶屋・桶屋・下駄職人・石工など職人の道具には農具や漁具などのように形態的な地域性が見られないものも多い。例えば、鍛冶屋が使用するオヤカタツチ(親方槌)やムコウツチ(向槌)は名称が異なっても、形態は県内及び全国的に比較してもほぼ同形である。そのような中で、屋根職人の道具は例外で、地域性が現れる資料のひとつである。また、伊勢原市大山の木地師道具、小田原市酒匂の物指職人道具、秦野市の傘職人道具などは、限られた地域で活躍してきた職人で、彼らが使用した道具は全国的にも貴重な資料といえる。以下、主な職人の道具の概要を述べておく。

このコレクションは、開館当初から、長年にわたって収集してきた資料で、そのほとんどが県民のご厚意によるものである。ご寄贈いただいた多くの方々、収集の際にお世話になった多くの方々に対し、記して感謝の意を表したい。また、今回指定を受けた職種についても、県下に存在した職人の一部にすぎないので、今後も機会ある毎に収集を行いさらに充実したコレクションに発展させて行きたい。

「神奈川の職人の道具コレクション」職種別解説、資料点数

以下、「神奈川の職人の道具」コレクションの職種別の概要を記す。また、*のあるものは今回の展示会に出品される道具である。

1 木地師道具(伊勢原市大山)* 5件80点

大山の木地師は、『新編相模国風土記』(天保12=1841)によると、「^{ごうき}盒器 坂本村辺に多く製す」(坂本村は現在の大山)とあり、この頃すでに存在していたことがわかる。現在、大山の木地製品の代表的なものに「大山独楽」があるが、これは近世の大山信仰と結びついて発展してきたといわれている。関東各地から訪れる大山詣での人々が、五穀豊穰・商売繁盛などの縁起物として買い求めた。それは、コマの回りと金運がついてまわるといわれ、人々の夢を誘った。昭和初期には30軒以上も活躍していたが、後継者難で現在では僅か3軒が伝統を守り続けているにすぎない。県下では、大山の他に箱根・小田原地域でも江戸時代から存在していた。2地域とも山

に囲まれ、材料の木が自由に入手できたことが木地屋業を発展させた。代表的な道具にロクロ(轆轤)がある。

2 物指職人道具(足柄上郡松田町総領、小田原市酒匂) 4件172点

小田原市酒匂地域に発展した物指作りは、周囲に良質な竹が豊富に茂っていたことと関係する。最盛期の昭和30年頃には、年間生産量が全国の80%にあたる700万本を数えた。その後、まもなく竹の開花現象による竹枯れが始まり、材料の入手困難が要因となり、衰退の一步が始まった。制作方法は材料にカタガネ(型金)を当て、カマで一目盛りずつ掻き、そこへ墨を染み込ませる。

3 傘職人道具(秦野市入船町) 1件79点

和傘が、われわれの周りから消えて久しい。本資料(昭和51年寄贈)は、おそらく県内最後の傘職人の道具であろう。道具を大別すると、骨になる竹を切り・割り・削る道具類、及びそれを組み合わせたものに紙を貼る道具類である。紙を貼る際に用いられるハリウマという道具は、江戸時代の職人絵にも描かれており、歴史的にも価値があるものと思われる。

4 下駄職人道具(愛甲郡愛川町半原、横浜市南区永田山王台・磯子区丸山・旭区善部町、津久井郡城山町小倉、相模原市橋本) 6件180点

組取りといい、下駄職人独特の鋸(カドヒキ・イトビキ)を使い、ひとつの木片から一足分を切り出す技術があった。現在は需要も少なく、問屋から仕入れた下駄に鼻緒を据えて販売する例が多い。カドヒキ、イトビキをはじめ、歯と歯の間を削るジュウノウノミなど、特殊な道具が多い。

5 桶職人道具(足柄上郡松田町総領、小田原市酒匂) 4件307点

飯ビツ、手桶、洗い桶、風呂桶など桶類の多くがプラスチックやステンレス製に変わり大量生産されている。桶作りの技法は、短冊状の板片を円形状に並べ、箍(タガ)で締め、底板をつける。そのため、道具は短冊状の板を水漏れのないように正確に削るショウジギダイ(鉋)、湾曲に削るウチマル・ソトマル鉋などが特徴的なものであろう。

6 指物師道具(横浜市南区中村町)

1件117点

箆笥、机などの家具類を作る職人の道具。「さす」は物指しを使うことを意としていることから、曲尺の類を自在に使って、きっちりとした細工を行なうので指物師と呼ぶという。本資料は明治21年生まれの職人が、昭和40年まで使用したものである。

7 大工道具(厚木市七沢・酒井)*

2件154点

伝統的な大工道具は種類及び数が多いのが特徴である。例えば、鉋類は平鉋・際鉋・面取り鉋・溝鉋・丸鉋などがある。さらに、平鉋などは荒削り・中削り・仕上げ用などがある。現在は、大工道具の基本的な道具である鋸、鉋、鑿などは電動化した。

8 船大工道具(足柄下郡真鶴町真鶴、平塚市千石河岸、横浜市神奈川区浦島町)

3件326点

県下で木造船を作れる職人は数人になった。本資料は海の船を作った職人の道具である。特徴的な道具にツバノミ(鋸鑿)がある。板と板を接ぎ合わせるために船釘を打つが、その前にツバノミで釘が通りやすいように釘孔をあける。鑿の穂の根元に鋸が出ており、打ち込んだ鑿を抜く際に、鋸の部分を金槌で叩く。このほか、水漏れのないように仕上げるための、スリアワセ、キゴロシなど独特な技法がある。また、船釘は昭和57年に横浜市の鉄工所の職人によるものであるが、県内最後の船釘作りの職人であろう。

9 鍛冶屋道具(横浜市都筑区川和町、横須賀市佐野町、津久井郡藤野町牧野、藤沢市宮原、三浦市初音三戸他)

6件277点

かつてはどこの村でも鍛冶屋が存在し、鋏、鎌、鉋、包丁など生活に欠かせない品々を作っていた。本資料は、横浜市都筑区川和で平成2年頃まで活躍した職人(明治40年生)の道具が中心である。

鍛冶屋の荒神(かじやのこうじん) 正月2日の仕事始めに作り、仕事場の神棚に供えたり、柱に打ちつける。作るものは、剣、葎の鍵、鎌、鉋などのミニチュアが多いが、三浦市の漁村の鍛冶屋では漁具のミニチュアが見られ興味深い。

10 石工道具(足柄下郡真鶴町岩、厚木市七沢、鎌倉市今泉)*

7件178点

真鶴町、厚木市、鎌倉市の三地域の道具である。真鶴町のもは、俗に真鶴石、根府川

石といわれる石を山から切り出す石工の道具である。厚木市のものは、厚木産の七沢石を主に細工する石工の道具である。鎌倉市のものは、鎌倉石と呼ばれる石の切り出しと、細工する道具である。鎌倉石は栗石とも呼ばれるように柔らかいが、水や火に強くカマドや家の礎石などに使用された。また、墓石、石垣、敷石、風呂釜、井戸枠など幅広く用いられた。

11 屋根職人道具(津久井郡城山町川尻・小倉、大和市深見、平塚市土屋、横浜市旭区善部町・戸塚区名瀬町・鶴見区矢向) 9件21点

茅屋根を葺く職人の道具。基本的な道具は、葺いた茅を縄で押さえる際に使用する針、葺いた茅を切り揃える鋏、葺いた茅を整えるコテ、縄や竹を切る刃物である。この刃物に地域性がみられる。川崎・横浜・横須賀・大和・藤沢市あたりではサスガという日本刀の形態をした小刀を使い、津久井・秦野・小田原市あたりでは屋根屋用の鎌を用いる。建物の洋風化や茅の入手困難などの理由から、わずかに残る職人も文化財的な建物の葺き替えに従事しているのが現状である。

12 杉道具(愛甲郡愛川町三増) 1件42点

大木から板材や角材を切りだす木挽き職人の道具。リンバという櫓を組み、そこへ大木をカスガイで固定し、マエビキという大きな縦挽き鋸(大鋸)で切り出す。この鋸は、有名な北斎の富嶽三十六景の中の「遠江山中」に描かれている。道具は、鋸・カスガイ・クサビが主であるが、鋸の手入れの目立て用具も欠かせない道具である。本資料は、昭和20年頃まで活躍した職人の道具である。

13 漆掻道具(南足柄市飯沢、南足柄市矢倉沢) 2件12点

漆の樹から、樹液を採集する道具。漆の樹に傷を付け、そこからしみ出す樹液を集める。道具は樹に傷を付けるカキガマ、しみ出た樹液を採集するナゼベラ、樹液を入れるツミオケなどが基本的な道具で、種類は少ない。

14 竹細工職人道具(横浜市港北区新吉田町) 1件14点

竹製の籠や箆類を作る職人の道具。現在は、桶類と同様にプラスチックやステンレス製に変わり、大量生産されている。道具は、竹を切る鋸類と、割る、削る鉈類が基本的な道

具で、種類は少ない。

15 箕職人道具(足柄上郡山北町岸)

2件13点

箕は、穀物を選別したり運搬するもので、農家では必需品であった。本資料は、足柄上郡山北町で昭和48年頃まで使用した道具である。山北町では、冬期の農閑期に農家の副業として箕、箒、トオシなどを作っていた。明治期が最盛期で、終戦前後まで行なわれていた。

16 ツケギ職人道具(津久井郡津久井町長竹)*

2件5点

ツケギは、マッチが普及する以前のもので、イロリなどに火種を保存し、そこからツケギに火を移しカマドなどの火を起こした。ツケギの材料は、サワラ、松、杉などであるが、サワラが火の付きがよい。道具は、ショウジキ台という匏の一種が特徴的なものである。津久井地方では、昭和20年頃まで作られていた。

17 ダイタ職人道具(愛甲郡愛川町角田)*

1件5点

ダイタとは、杉材を薄く割り、屋根葺材に使用した。これを作る職人をダイタヘギ、イタヘギという。道具は少なく、杉材を薄く割るための刃物(大割包丁、剥包丁)と、それを叩く槌が基本的なものである。ダイタ葺きは物置や作業小屋などに用いられた。なお、ダイタの寿命は5～6年である。ダイタの生産は明治末期まで盛んであったが、大正期に入るとしだいに衰退していった。本資料は、愛甲郡愛川町で大正10年頃まで活躍した職人の道具である。

(『神奈川県立歴史博物館だより 151』県立歴史博物館、平成11年7月より転載)

参 考 文 献

本図録、そして展示会においては、さまざまな文献を参考とさせていただいた。本図録を読んで興味をもたれた方は、ぜひ下記文献にもあたっていただきたい。

編著者	書 名	刊行年	発行者
-----	-----	-----	-----

【 職人一般 】

- 木下 忠 「民俗技術と技術史研究」 『日本民俗文化大系14技術と民俗(下)』 昭和61年、小学館
遠藤元男 『ビジュアル史料日本職人史 職人の現在』 平成4年、雄山閣
小澤 弘 「江戸の庶民文化 職人」 『名品揃物浮世絵9 北斎』 平成4年、ぎょうせい
前場幸治 『大工今昔 - 相模職人の周縁 - 』 昭和61年、前場資料館
前場幸治 『棟梁のよもやま話』 平成10年、(株)冬青社

【 厚木、神奈川の職人 】

- 鈴村 茂 『厚木の職人史』 昭和55年、県央史談会厚木支部
神奈川県教育委員会 『神奈川県の諸職』 平成4年、神奈川県教育委員会
相模原市教育委員会 『諸職調査報告書』 昭和59年、相模原市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館 『職人のわざ(上、中、下)』 昭和60、62、63年、茅ヶ崎市文化資料館

石 工

- 鈴村 茂 「七沢石」 『野だちの石造物』 昭和47年、厚木市教育委員会
厚木市文化財協会編 「石屋」 『厚木の民俗1』 昭和56年、厚木市教育委員会
厚木市史編纂委員会編 「鑄工と石工」 『厚木産業史話』 昭和51年、厚木市

大 工

- 大河直躬 『ものと人間の文化史5 番匠』 昭和46年、法政大学出版
前場幸治 「大工道具」 『郷土資料展示室だより13』 昭和63年、厚木市教育委員会
厚木市史編纂委員会編 「林業と職人」 『厚木産業史話』 昭和51年、厚木市

下駄屋

- 厚木市文化財協会編 「各家の衣生活」 『厚木の民俗7』 平成3年、厚木市教育委員会

菓子屋

厚木市文化財協会編 「菓子屋」『厚木の民俗1』 昭和56年、厚木市教育委員会

吉田隆一 「菓子屋の道具」『郷土資料展示室だより10』昭和62年、厚木市教育委員会

【 「職人の道具」関連展示会 】

厚木市教育委員会 『あつぎの職人』 平成5年、厚木市教育委員会

神奈川県立歴史博物館 『神奈川県の職人の道具コレクション』平成11年、県立歴史博物館

横浜市技能文化会館 『古文書に見る職人のくらし』平成11年、横浜市技能文化会館

平塚市博物館 『木のぬくもり』平成8年、平塚市博物館

神奈川県立博物館 『木地屋の世界』昭和60年、神奈川県立博物館

神奈川県立博物館 『職人の道具』昭和55年、神奈川県立博物館

平塚市博物館 『飛騨の民具』昭和58年、平塚市博物館

板橋区郷土資料館 『板橋職人仕事 活きている伝統技術』平成11年、板橋区郷土資料館

仙台市歴史民俗資料館 『働くものと道具展』平成2年、仙台市歴史民俗資料館

柏崎市立博物館 『柏崎の職人 その技と道具』昭和62年、柏崎市立博物館

名古屋市博物館 『職人の世界』昭和60年、名古屋市博物館

大田区郷土博物館 『大田の職人 その道具と造形』昭和60年、大田区郷土博物館

おわりに

職人さんの仕事は本当に面白い。何時間見てもあきることがない。以前、鍛冶屋さんの仕事をビデオ撮影させていただいたときの正直な感想である。そして、その製品も、道具も、職人さん自身まで含めて興味の尽きることはない。ということで、厚木ではすでに平成5年に「あつぎの職人」展を開催している。では、今回あらためて開催する意味はどこにあるのか。平成11年2月に「神奈川の職人の道具」コレクション(17職種1,928点)が県の有形民俗文化財指定を受けることとなり、その現地でのお披露目の意味がもちろんある。そして、前回展示できなかった道具や揚州の大工道具なども展示したかった。

しかし、何より厚木の職人道具のコレクションについて、より充実したものにするには、展示を通して、市民の方々に資料収集の意義を知っていただくのが一番と考えられるからだ。

今回の展示は、職人さんを理解するための、そしてより充実した職人の道具コレクションを作るためのワンステップにすぎない。展示を御覧いただいた皆様方からのご意見、ご批評とともに、職人に関する情報を乞う次第である。

第9回収蔵資料展

職人の道具

神奈川の職人の道具コレクション

発行日 平成12年6月1日
編集 厚木市郷土資料館
神奈川県厚木市寿町3-15-26
TEL 046-225-2515
発行 厚木市教育委員会
